

二つの人形研究紹介

清水いく子

人形についてなされた研究は、はなはだ少ない。ここに紹介する研究は、古いものではあるが、代表的な人形研究である。

(1) ジェームス・サリーの「人形の研究」

倉橋惣三氏は、人形は子どもと深いかかわりがあるという考えの基に、『婦人と子ども』第十一巻第十二号（明治四十四年）の「机辺だより」で十八頁半にわたり、英国の心理学者ジェームス・サリー（James Sully）の「人形の研究」を紹介している。その大要を述べると次の通りである。

① 人形の定義は未定である（「人形とは何か」という定義を下すことが難しい所に、人形研究の困難さがある。人形は生命のない玩具に過ぎないと考える人が多いが、児童にとって人形は生きてゐる）

② 人形の種類（人形には、(1)成人が一の型に当はめて作る人形、即、伝習的な人形と、(2)子どもが自己の想像から、自分で作った人形がある）

③ 人形の選択は子どもの自由である（今迄は、児童に与える人形は、在来の因襲から来るものや、商品として売られているものに限られていたが、持主たるべき子どもの好みに従うべきである）

④ 成人を象徴した人形と其弊（成人を表した人形の多くは、無暗に立派な衣装を飾るとか、特殊な偉人物を表すとかいう種類に限られている。しかし、これらの高価な人形は子どもの会心の友とはなっていない）

⑤ 着色した人形と道化た人形の与える感情（それらの人形は、子どもがそれを手にした時は、一寸驚くかも知れぬが、純粋な愛情は育ちににくい）

⑥ 子どもの手製人形と其価値（成人の手で作られる、どこの店でも見られるおきまりの人形の外に、児童自らの手で作られる人形があることを忘れてはならない。そして、子ども自身に、その一

方を選ばせると、後者、即、粗雑な、不恰好な手製人形を取ることは疑いのない事実である)

⑦腰掛や徳利が何故人形に見えるか(このように人形らしからぬ物質を、人形として取扱う場合が多い所をみると、子どもは人間の容を大まかに暗示している人形を選ぶ傾きがあると思われる。こうした形の暗示は、子どもの初期の描画にも表われている。子どもにとって、円形、楕円形、又は人間の頭や体に類似した形、足に似通った二つの交叉線等の想像が大切である)

⑧人形の撰択と頭髮との関係(兒童が、人形を撰択する標準は、体に附いている頭髮等の附屬物に影響される)

⑨人形は飽く迄活動的なものである(人間の機能のうちでも手が先に発達することは生理的にも明らかであるが、子どもの人形の知識についても同様である。即、他よりも手についての知識がより多く発達する。これからして、人形は絵画のように靜思的なものでなく、飽く迄も活動的なものである。人形遊びの中では人形に衣装を着せる遊びが最も盛んである)

⑩兒童は人形遊びで何を表すか(最初は、子どもが人形を抱いていることが、成人の眼に映ずると、子どもの心に一種の誇りともいふべき感情が起り、限らない満足を感じる。それから発達して種々の遊びが行われる。〔例えば、衛生、食事、就寝、看病、保

育、葬式等〕

⑪人形は子どもの最も親密な知己である(子どもは人形を、自分の幼児として扱う他に、自分と同年輩の最も親しい友として扱う)

⑫一人の人形を好む情と沢山の人形を好む情(子どもには、その両方の場合があり、後者は家族としての単位をなすことがある)

⑬人形が擬人を失う場合(人形遊びでは、結婚式のような目立った儀式や、社会的競戦が行われる。この場合、人形の擬人が失はれ、人形は人形芝居の役者、子どもは、その監督者になる)

⑭粗雑な人形に対した時の子どもの錯感情(子どもは粗雑な人形にでも、一寸人間の恰好さえ付いていれば、優に人間の錯感を呼び起すだけの想像力がある)

⑮粗雑な人形を喜ぶのは兒童一般の通例である

⑯人形はどんな物として子どもに取扱われるか(子どもは人形を幼児として扱う。一方、人形遊びは、世界じゅうに存在し、古来から主として女の遊戯として伝わり、その大部分が育児の模倣であったことからすると、母としての立場から人形を愛すると思われる)

⑰人形遊びに於ける子どもの主觀的欲望(子どもは、保育される地位を脱して、保育する地位に立とうとする主觀的先天的欲望が

あり、人形遊びはこれを満たすものである。ともかく、親としての情愛が、人形遊びの根本となっている。

今後の課題として、子どもの年齢が、青年期になるに従って、人形に対する感情がどのように変化するかを調べることを掲げている。この研究の特色は、他の多くが、単に実験結果の報告に過ぎない傾向のある中で、それを総合し、それから推理して、一般の人形に通ずる真意を明にしようとした点にある。

(2) スタンレー・ホルルの「人形の研究」

さて、サリーが、人形の科学的研究の創始者と述べ、論文にも幾度かふれているところのスタンレー・ホルルがA・C・エリスと共に行った人形研究を次に紹介しよう。

児童研究の創始者であるグランビル・スタンレー・ホルル（一八四四—一九二四）が、「人形の研究」を行なったのは、一八九六年、五十六歳の時である。人間を単に身体的、形態的進化論でみるのではなく、人間が生まれてから死ぬまでの成長と変化を内面的にみてゆこうとしていた、いわば、心の進化論者であったホルルに、「人形の研究」をさせた深いところにある動機は何である

うか。それを、彼の幼年時代—アシュフィールドやウォシントンで過した田園生活—や、更に、ピルグリム・ファーザーズの一族であったという母方の先祖にまでさかのぼって、イギリスから、メイ・フラワー号で移住することまで重ねて考えてゆくことは、大変興味深いことと思われるが、今回は省きたい。

研究の方法として、彼は八百人の先生や両親の間に、質問表を配り返答してもらった。その返答は非常に変化に富んでおり、大人による幼児の頃の回想録、母親による子どもの観察、及び、個人的な子どもの人形に関する事例等であった。それらを整理し、彼なりの立場から推論を加えたものである。

①人形の材料及び代用品（八四五人の子どもの中で、人形の材料についての質問に、蠟ろうの人形を選ぶ者一九一人、紙一六三人、陶器一五三人、きれ一四四人であった。子どもは人形の代用品として、枕、棒、徳利、とうもろこし、針、胡瓜、箒、掛釘、椅子を用いる。その他に、箱、水差、ブラシ、サジ、本等々、大人の考えの及ばない代用品が挙げられている。これらは、子どものアニミスティックな空想力と、人形の本性によることは説明すべくもない）

②人形に対する精神的情感の特質（良い、冷い、嫉妬深い、悪い、

怒り、行儀が悪い等の順である)

③ 人形の食物と食事 (食物を与えることも人形遊びの主要な一部である。食物の種類、与え方が述べられている)

④ 人形の就寝 (三二九人が人形の就寝について述べている。人形を揺らしたり、子守歌を歌って寝つかせる)

⑤ 人形の病氣 (人形は多くの病氣―はしか、熱、風邪等を持っている。その看病も人形遊びの一つである)

⑥ 人形の死、葬式及び埋葬 (人形の葬式及び埋葬が行なわれるが、一度埋葬した人形を、再び掘り出すこともある)

⑦ 人形の名前 (名前は、友人や人形を子どもに与える人によってつけられる。それらの名前は、可愛いとか、お気に入りであるとか、聞いた話の登場人物である等の理由で選ばれる。)

⑧ 人形の嫌 (人形が罪を犯すと懲罰を与えることがある)

⑨ 人形の衛生、トイレット (衣類を着せたり、顔を洗ったり、髪をとかず等の人形の身体を清潔にする遊びをする。)

⑩ 人形の家族、学校、パーティ、結婚式 (人形遊びで家族を持ち、学校、パーティ、結婚式、旅行等社会的なことをする)

⑪ 人形の付属物 (人形には衣服、食器、家具等の付属物がある)

⑫ その他 (人形遊びの様々な形の相対頻度、人形と赤ん坊との関係、不具の人形、男児の人形遊び―女子だけでなく男児も人形遊

びをするが、男女の間で人形に対して持つ感情には違いがある。―等について)

⑬ 人類学的メモ (最後にホールは、様々の文献を用いて、古代エジプトの人形に始まり、日本の雛祭りや端午の節句に至るまで、各国の人形に人類学的にアプローチを試みている。そして、「人形」と「偶像」との関係についても興味深い指摘をしている)

〈参考文献〉

○ G.S. Hall "Life And Confessions of A Psychologist" D. Appleton And Company New York 1924

○ A.C. Ellis & G.S. Hall "A Study of Dolls" Aspects of Child Life and Education Arno Press New York 1975

第9回みどり会夏季合宿

研修会のお知らせ

○ 期日 八月二十一日―二十三日

○ 場所 熱海 岡本ホテル

尚、詳細は次号でお知らせいたします。